

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390102087		
法人名	社会福祉法人 愛誠会		
事業所名	グループホーム八景水谷		
所在地	熊本市北区八景水谷1丁目5番1号		
自己評価作成日	令和2年10月4日	評価結果市町村受理日	令和2年12月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokennsaku.jp/43/inndex.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和2年10月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

交通アクセスのしやすい反面、リスクの高い立地条件となっているため、いかに過ごしやすい環境を提供できるか工夫をしている。玄関は安全対策として顔認証を導入し、防犯も含め安全面に配慮して環境面を整えている。更にご本人が培ってきた、今までのライフスタイルを合わせたケアを提供し健康面に関しては、入院・治療の必要性が発生しても施設内での適切な医療を提供できるように医療との連携を密に行っている。また、ご本人の精神的負担や認知症の進行を防ぐ実践として、新たにユマニチュードケアの取り組みを行っている。各ユニットの特色として、菜の花ユニットは身体機能は維持できた方が多く、四つ葉ユニットの方は身体面と認知面のケアが中心となっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

幹線道路に面したホームでは、オープン当初から顔認証システム等による安全対策と、人的環境(職員により見守りや観察力等)に力を入れる等リスク軽減や危機管理意識を高くして臨む一むである。ユニット間での身体ケアや平均年齢の違いなどもある中、コロナ禍という困難な状況にあっても、入居者の得意分野を発揮した日常や、車窓から四季を楽しみ、壁面作りでは作る楽しさや出来たという満足感、室内での運動会等職員が試行錯誤しながら彩りある日常を支援している。開設して3年、職員の育成時間も過ぎ、担当の明確化が責任あるケアに繋がり、職員の提案による家族への発信源の変更(個別報告)が家族との関係性に一層の深まりを見せる等初期基盤が確立しつつあり、更に充実した地域生活へつなげるものと大いに期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	組織全体の夕礼や検討部会やユニット会議にて理念の共有に努め実践に繋がるように行っている。更に常に見やすい玄関の所に掲示している。	“笑顔・感謝・思いやり”を基に、職員のケア規範としてユマニチュードケアを中心とすることを目標とするホームである。また、ホームの重点施策を全員で精査するとともに、職員個々も目標を持って日々真摯にケアに取り組んでいる。幹線道路に面するというハード面での困難さを、オープン時から顔認証システムの導入とともに、人的な環境にも力を入れるという安全対策を徹底している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	清水まちづくりセンターの清水公民館等、外部との情報交換を行い交流内容等工夫し働かしている。また、地域行事への参加も心掛けている。中でも近隣の美容室行かれてたり、地域行事への参加を行っていたが、今年度はコロナウイルス流行により控えた。	コロナ禍のなかで外部との交流は難しい状況にあるが、これまでは公民館活動への参加や、地域での花見やどんどや、夏祭り等への参加により地域住民との交流の接点としていた。外に出れない分、室内での運動会や音楽・作業療法等駆使している。	コロナ禍の状況次第によっては、これまで行われていた活動の再開等、地域の中での生活が更に充実されることを期待したい。また、ホームの中で、地域住民(ボランティアとしての訪問等)との交流ができる事が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域運営推進委員の方へ認知症の方の実情や身体拘束について報告し、現在行っている支援を書面にて報告している。認知症サポーター養成講座の依頼があれば進んで地域へ出向いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域運営推進会議を通し現状報告や課題を挙げて話し合う場を設けていた、コロナウイルス流行に伴い令和2年4月より中止している。施設の取り組み内容については、書面で郵送している。	地域包括支援センター、自治会長、民生委員の他、全家族に参加を呼びかけ開催しているが、コロナ禍にあつては書面での報告としている。身体拘束についても資料を基に説明されている。また、参加者からの有意義な意見も出されており、サービス向上に活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	困りごと等こまめに連絡を取り、入院発生時等、事業所の実情やサービスの取り組みを伝え協力関係の構築に繋がるよう取り組んでいる。	行政・病院・ホーム側との話し合いにより、まずは介護申請から連携を図り入居に至ったケースや、成年後見制度利用に際し窓口相談に出向いたり、介護保険更新調査時情報を発信している。キャラバンメイトや校区の徘徊模擬訓練等企画・参画する等社協等多様な関係機関と協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	検討部会や各ユニット会議にて身体拘束をしないケアについて学びの場を設け、実践に活かせるよう取り組んでいる。2ヶ月に1回開催している地域運営推進会議でも議案として報告していたが、今年度は郵送にて報告している。	検討部会(毎月開催)での話し合いや、法人での研修参加により身体拘束の弊害を正しく認識している。職員の言葉かけ等スピーチロック等特に注意喚起し、入口のソファ等環境も拘束にあたるのではと動線も拘束の一つと捉えている。また、認知症委員会の中で年度計画とその進捗状況をアセスメントする等拘束の無い環境に努めている。	認知症について、学びを深め対応する等入居者個々に対するケア向上に真摯に向き合うホームである。立地的な環境には全員が高い意識でケアに臨まれているが、今後も継続して入居者の外出気配の察知や帰宅願望への寄り添い等職員の持つケア力を発揮して頂きたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議やユニット会議等、学びの機会を設け細心の注意をし、防止に取り組んでいる。またユマニチュード習得チェックリストを行い分職員の質を分析している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	玄関先にパンフレットを準備し、他にもユニット会議、検討部会で時間を設け学び、活用できるように支援に努めている。NPO法人とも連携を図っている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関する説明責任は果たしている。また改定の際は、書面で説明を行っている。遠方の方は郵送を行い電話で説明を行い理解を得た上で同意を頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	地域運営推進会議に参加して頂き意見を述べる機会を設けていたが、コロナウイルス流行に伴い、メールやラインを活用している。	入居者には日々の生活の中で聞き取りしたり、管理者への直接の申し出もある他、食に関してアンケートとして入居者に聞き取りしている。家族へは意見箱やライン・メールでのやり取り、家族通信(3ヶ月毎)や担当者からの報告等により情報の共有化を図っている。また、運営推進会議も問題提起の場として生かされ、運営推進会議時に家族会を開催したケースもあり、家族のハード面での要望に随時対応する等上手く運営に取り入れている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の検討部会や各ユニット会議などで意見や提案を聞き反映させている。各担当を明確にして検討部会で報告している。	管理者は日々ケアに入りながら職員とのコミュニケーションを図るとともに、グループラインを活用し情報共有や意見交換を行っている。家族への報告方法等職員の意見が反映し、開設より3年を過ぎ体制が整う中で、職員の担当を明確にし、毎月の検討部会での意見交換をケアサービスに反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務に関しては希望休を取りやすくし、子育て支援等にも配慮している。向上心が保てるように各自の目標を把握し、職場環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の勉強会や認知症実践者研修や権利擁護研修への参加を推奨している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	上熊本拠点や本部での施設サービスの会議や外部の研修への参加をし、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に生活歴など情報交換をし、入居後不安なく過ごして頂けるように配慮し関係づくりに努めている。日々のケース記録や申し送りノート等を活用し、生活状況の中でより良い関係づくりを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に相談を受け、情報交換を行い安心感を持って頂けるように配慮している。また病院からの入所の際は、病院でのカンファレンスや情報交換を行い、信頼関係を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスについては、遠方の家族も多く今年度は会議開催も出来ず、メールやライン、オンライン電話などを活用し、その時必要な支援を検討し対応を行った。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の利用者に応じた関りの中で関係の構築に努めている。菜の花ユニットの方は自分の意見をきちんと言われるため、その意見を取り入れている。四つ葉ユニットの方は、ご家族の意向やご本人の言動を尊重している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的施設内の取り組みや生活状況等を書面化して情報の共有を図っている。コロナ対策として面会は控えているが、窓からの面会、メールに写真添付、携帯やラインで直接、話す機会を設けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	事業所の近所に住まわれていた方は、行きつけの美容室や行事参加しておられ馴染みの関係が継続できるように努めていたが、コロナ対策やインフルエンザ等感染症が落ち着くまでは控える。	家族との外食(誕生日)、図書館での行事参加等これまでの関係性を継続していたが、感染症対策として外へ出向くことは難しい状況にある。得意分野(洋裁)を發揮させたマスク作りやアイロンがけ、電子ピアノの弾く方、文藝春秋を読んだり、毎日日記を書かれる方、新聞を読まれる等在宅での生活沿線として捉え支援している。また、入居者と職員との関係も馴染みになりつつある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員や利用者同士との馴染みの関係づくりを行っている。また、テーブル等席の配置への配慮に努め共に支え合う関係作りに繋がるように物的・人的・空間の環境を整える工夫を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も病院等との情報交換を行ったり、行政と連携し施設に戻れる場合は、その相談支援も行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人とコミュニケーション取りながら、不安や思い等を拾い上げ、家族から聞き取りを行いニーズを把握できるように努めている。	入居者個々の生きて来られた人生を視点にしたケアに取り組みたいとして、ユニット会議での話し合いや家族からのメール等駆使しながら、“入居者本人が達成感のある日常”になればとケアに当たっている。入居者個々への言葉かけの統一や、“〇〇をして欲しい”等の言葉を聞き洩らさず、申し送りノートを介して情報を共有し、プランニングに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの生活歴や環境を知り入居前までのサービスの経過等の情報を把握し生活の中に取り込んでいます。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の一日の過ごし方については、認知面の低下や周辺症状に合わせた残存機能を活す場を設け、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各ユニットにて介護計画含めお一人おひとりの現状を話し合いながら意見や工夫を行い改善をすることにより介護計画に反映している。	本人・家族の意向などをもとに、短期目標期間による見直しや、体調変化時及び入退院時等担当者会議を開催している。協力医や訪問看護等と話し合いを重ね、主治医等指示をプランに組み入れたケースもある。家族への説明と、同意を得たプランは、個々のニーズに対して詳細な具体的サービス内容である。	コロナ感染症の収束のめどがつけば、家族との話し合いにより、更に家族の意向を聞き取りしたプランが作成されることと期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎月のユニット会議や検討部会、申し送りノート、業務日誌での情報交換により実践内容やプランの内容をその都度検討している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族のサービスに関する要望が多様化している為、柔軟な支援に繋がるように努めている。今年度は家族の面会制限により情報交換に関しては、手紙やメール、ラインや電話、携帯を活用し取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事への参加や馴染みの美容室などの利用を行っている。その他にも熊日新聞や明治牛乳等の配達も活用している。今年度は地域行事への参加は控えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の往診や受診、訪問看護・リハによる支援もあり、医療面の充実を図っている。	本人・家族の了承のもと全員が協力医療機関をかかりつけ医とし、現在は往診での支援として、認知症への理解ある協力医の存在は、家族やホームの安心・信頼につながっている。看護職員4名や吸引のできる職員の配置、職員の日ごろの関わりから異常の早期発見など健康管理に努めている。必要に応じて訪問看護や訪問リハを取り入れている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ケース記録は看護師も一緒に緑で記入。看護職員や介護職員も同じ申し送りノートにて情報交換を行い連携を図っている。必要な受診などはかかりつけ医へ連絡し適切な医療を提供している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力体制を密に取りながら入退院時のサービス担当者会議などを通して病院関係者と関係づくりを行っていたが、骨折・入院に当たり面会が出来ず、電話や書面での情報交換を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所で行えることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期については書面化し入居の際、家族の意向を確認している。また、必要に応じて再度確認を行い支援が出来るように努めている。現時点では2名の方が施設内での看取りを希望され実践した。	入居時にホームの方針を伝え、書面で現在の気持ちなどを確認し、必要に応じて話し合いの機会をもち意向に沿った支援に努めている。この1年間で2名の方の最終を支えており、支援後は職員のケアを含めて、話し合う機会を持っている。	必要に応じて意向を確認しながら最終を支援し、本人をしのびながら振り返りの機会が持たれている。今後も振り返りを活かしながら、普段のかかわりを大切に、ホームに出来る支援の継続に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	看護師による緊急時の指導や急変時の対応などはユニット会議や検討部会で話し合いを行う。対応の仕方などは看護職員からの直接の指導もあり実践的に行い周知に努めた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策に関しては、担当を決め消防訓練を自主訓練を2ヶ月に一回、総合的に年1回としている。防火訓練だけでなく防災も含め取り組んでいる。また避難確保計画の見直しを行った。	防災担当職員を中心に、2カ月毎自主訓練と年1回総合訓練を行い、備蓄等随時備えている。また、防犯対策の一つとして、顔認知システムを導入している。いまだ収束しないコロナ感染症については、家族にとっても面会が出来ないことを含め、心配の一つであり、ホームの取組や面会などについてもこまめに発信を行っている。	昨今の自然災害は想像を超えるものであり、被害を風化させず、あらゆる場面を想定した災害対策に取り組まれることが必要と思われる。また、コロナ収束のおりは、家族や地域住民の協力のもと訓練を検討いただきたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけなどのコミュニケーションの取り方についても各ユニット会議や検討部会で問題がある場合は検討している。特に菜の花ユニットの方はプライバシーへの要望が強い為、慎重に対応している。	ユマニチュードケアを取り入れ、認知症を十分理解し日々の業務にあたり、七つのゼロ、寝かせつきり・オムツの使用など入居者の自由を奪わず、尊厳を大切に支援することをスローガンの一つとし、管理者は認知症の種類を理解して、支援することを日ごろから指導している。入浴は同性介助への希望に応じ、失礼のない言葉使いや声のトーン、苗字にさん付けを基本とした呼称など周知徹底を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	担当者を決めニーズに合わせた細やかな対応が出来るように各委員会で検討しユニット会議や検討部会で再度問題提起を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	排泄も個別にて対応し食事形態や道具を活用し本人のペースで召し上がって頂くように配慮している。入浴に関しても希望に合わせて同性介助を実施している。更に日々の日計表で分析を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合わせた衣服の調整や化粧品道具も揃え、お出かけの際は化粧をして出かけているが、今年度は中止している。施設内のイベントの際、ネイルやマッサージなども取り入れ対応をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備は朝食のみ事業所で準備している。好みや食事形態なども工夫しその方に合った内容を提供している。能力的に手伝いを希望され方に応じた後片付けなどをお願いしている。	朝食と昼・夜のご飯のみホームで炊き、その他の副食は法人厨房で調理されたものを職員が受け取りに出ている。入居者が調理に関わる機会はほとんど無いが、たこ焼き会やお茶をたてるのが得意な方の出番、後片づけなどできることで食へのかかわりが持てるようにしている。自力で摂取される方の見守りや、ペースト食の提供、必要な介助など個々に応じて支援している。	食事は入居者にとって楽しみの一つであり、今後は定期的なおやつ作りなど、できることで食へのかかわりの機会を広めていかれることを期待したい。また、職員は味見の形で食する機会は持たれているが、同じものを同じ量摂ることで思いを共有できると思われ、検討いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士と連携し、その方に合わせた食事を提供している。食事・水分摂取量は日計表を活用している。更に体重増減に関しては測定を毎月行い、主治医へ報告しBMIにより食事量の制限や低栄養の場合の食事量の増量も検討している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの励行を行い、定期的訪問歯科を導入し適切な治療及び助言を頂いている。個別の問題点は歯科衛生士から申し送りや書面での報告を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄に関しては、その方の状態に合わせたケアを行っている。基本的にオムツ使用は控え、日中はトイレやPTイレを使用して頂くように配慮している。	日中は可能な限りトイレでの排泄支援に努め、感染症などの疾病にもつながらないように、安易にオムツに頼らない排泄支援に取り組んでいる。ユニット間で排泄支援の状況は異なるが、トイレや夜間を中心に使用される方のポータブルトイレは清潔を心掛け、マットの交換も定期的実施し不快なく利用できるようにしている。また、使用済みの排泄用品は、必ず新聞紙で包むことなどを徹底している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の把握により好みを把握し個別の飲み物を準備するなど工夫を行っている。また就寝前の水分補給も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の要望に合わせて対応している。同性介助を希望されるため、その配慮も行っている。また、入浴時の保湿クリームの塗布を行い保湿対策をしている。	入浴は同性介助への希望や職員との相性なども考慮し、週2回ゆっくり入ってもらえるようにしている。入浴できない時や皮膚疾患時などには、足浴も実施している。四つ葉ユニットには個浴の他、機械浴も設置しており、双方の入居者が身体状況に応じて利用している。	毎回湯の入れ替えを行いながら、清潔保持や寛ぎの時間になるよう努めており、今後も回数など本人や家族の意見も確認しながら支援されることを期待したい。また、浴室内に置かれたシェーバーについては、安全面から別の場所での管理が望ましいと思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々に合わせた生活習慣を大切に、ご自身の馴染みの枕や布団や毛布を準備してもらっている。ラジオやCDラジカセを活用し音楽療法も行っている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護職員の管理と介護福祉士の連携により4重チェックを実施している。病状変化や内服が変わった際には記録や各ユニットにある申し送りノートを活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個別に合わせた嗜好品やレクリエーション、役割を持って頂き気分転換に繋がるように行っている。例：折り紙を使っての創作、人形作り等		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	図書館や八景水谷公園等外出を行っているが、異常なる環境変化による健康面の配慮が必要な為、一人一人に合わせた外出は行っていない。今年度は外出制限があり実施できていない。	コロナ感染症が発生する以前は、地域への外出(図書館の利用・どんどや・まつりへの参加)や芝生での食事・ティータイム・リハビリ体操などへの取組が行われていた。現在はホーム内での歩行運動や活動が中心となり、身近な散歩をはじめ一人ひとりに応じた外出支援は難しい状況にある。	コロナの収束は見えない現状であり、外出気分を味わえるような旅行雑誌や写真集、ビデオ視聴なども有効かと思われる。また、立地面から安全確保も重要視しながら、外気に触れる機会が早く持たれる日が来ることを願いたい
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現時点ではお金の管理は預かり金にて対応しており、個人で持たせることはしていない。また家族の希望もあり本人に持たせることでトラブルになる可能性もあり希望されない家族が多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を活用したり、メール、ライン、オンライン電話、写真付きの手紙などで支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	衛生面や安全面に配慮し、照明の調整や空調、室内温度などにも配慮している。季節毎の壁面づくりやお花を活けたり、飾ったりしている。	電子ピアノの設置や陶芸・編み物など入居者の作品を紹介するなど休憩スペースの空間を中心に、左右に配置されたユニットは四つ葉と菜の花(なのか)と命名されている。双方のユニットは介護度や認知症の度合いも異なることから、職員は状況に応じた共用環境を整えている。ユニット間の行き来も、お隣さんとしての交流となっている。また、掲示物や庭先その他、職員が持ち寄った草花を飾ることで季節感を感じてもらえるようにしている。	職員によるハーモニカ演奏や日差しに配慮しながら外を眺められる環境作りは、外出が制限されているこの時期、入居者にとって何よりの気分転換の時間と思われ、継続した取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂と居間を分けており気の合う方向士で過ごして頂くよう配慮している。電子ピアノや両ユニットの多目的ホールでお話したり、歌を歌ったりして過ごして頂く、生活環境を整えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物(仏壇や位牌、専用のソファ、本・ぬいぐるみ等)を持ち込んで頂き、本人が安心して過ごして頂けるようにしている。	入居時に各ユニットを案内し、空き状況も見ながら可能な限り希望や相性なども考慮して居室を決定している。また、入居後も認知症など状態の変化に応じて、本人・家族の了承のもと、ユニットの移動も行われている。心の拠り所となる仏壇や家族の写真、ぬいぐるみをはじめ、若かりし頃からの愛読書(文芸春秋)や日記帳、洋裁品の置かれた部屋などこれまでの生活が継続できる環境が窺える。職員は日々の掃除や換気に努めるほか、コロナ感染症のため、面会が出来ない家族に対して、必要に応じて居室の様子を写真や電話などで知らせている。	居室には洗面台がついており、その方のペースで歯磨きや身だしなみの確認が出来ている。入口には居室名(こずもす・にちにちそうなど)を折り紙で掲示されているが、見当たらない個所もあり損傷なども含めて、定期的に確認されることが期待される。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーであり、廊下の長さも確保されており自主訓練として散歩や歩行訓練等を行っている。家事支援として、掃除や洗濯干し、洗濯たたみ等を行い、今まで培った日々の暮らしの中の雰囲気に触れて頂いている。時には季節感のある料理(筍を使った)を行っている。		